

朽木谷の歴史地理学的概観

小 牧 實 繁

A Historico-geographical Study of the Villages of Kutsuki Valley

Saneshige Komaki

琵琶湖の西を大津から今津へ走る江若鉄道の安曇川駅で下車し、バスで西に進むと、道は安曇川の溪谷に入る。その曲りくねった溪谷の道を暫く行くと、急に又谷あい平野があらわれて、何か桃源境に來たような感じがする。これが朽木谷である。

朽木谷は、狭い意味では、この安曇川の本流とその上流の谷、即ち土地の人々の所謂「川筋」を指すが、広い意味では、奥地の村々をも含めた朽木村全体であるとも言える。

この朽木村は、滋賀県では、野洲郡とほぼ同じくらいの面積をもつ、県下では最も広い村であるが、その面積の83%までが山林で、耕地は僅かにその2.4%に過ぎないという山村である。そして人口は、この広い村に4600人ばかりしかなく、それも、この村の四つの谷に分散して、そこに22の集落をつくっているものであり、そんな訳で、学校もこの村には10余りの分校があるという実情である。

この朽木谷が何時頃から開けたか、何時頃から村の歩みを始めたか、は明らかでないが、既に平安朝の頃には開けていたことが治暦四年の文書によつて明らかであつて^①、それが藤原頼通の家領となつて、朽木の杣として知られたのであつた。

この杣という言葉からも察せられるように、この谷の価値が、最初から、その森林資源にあつたことは、その自然の条件と照合するとき、容易に首肯せられるところであつて、古くは、奈良東大寺の建築用材も、一部はこの高島の奥から安曇川を筏で流して舟木に出し、舟木から更に琵琶湖の上を瀬田川へ^②、瀬田川から淀川

に流し、淀川から木津川を溯らせて木津に運び、木津から奈良坂を奈良に運んだものと考えられているのである。恐らくそんなことであつたのであろう。

用材と共に、この谷へ人間を導いたものにまた木地職なるものがあつた。轆轤を用いて、膳、盆、椀などを製造する木地の仕事それがあつた。そうしたものを作るのが木地師または木地家であつて、それには轆轤を用いるので、ロクロとも呼ばれ、今尚わが国各地の山中にその名残を止めているのであるが、その発祥地は、惟喬親王の伝説をもつ近江の国鈴鹿の山中、現在の永源寺村の奥にある君ヶ畑、蛭谷などと言われるのである。この朽木谷は、第一に樹木に恵まれ、そして地理的に君ヶ畑、蛭谷などに近く、のみならず、同じ山地として、これら鈴鹿の山中よりも寧ろ京都に近い関係もあつて、早くから木地師の一統がここに来着したものと考えられる。そして、その製品が後年この地の名産となつて、貝原益軒の「諸国めぐり」にも出て来るのである^③。現在でも朽木谷の奥地の木地山にはその面影が残つていて、大正の頃まではなお木地の業が営まれていたのである^④。

この杣と木地、これが古来この谷の象徴であつたのである。

しかしながら、朽木谷は固より山がであるので、ここには杣と木地の外に、また炭もあつた。

炭が何時頃から焼かれることになつたか、その起原は明らかではないが、鎌倉時代になると、朽木でも炭が焼かれたようである。伝えられるところによれば、安曇川の本流筋に当る村

井の人が、領主佐々木の命を受けて鎌倉に下り、焼き方を習つて村井に帰り、村井の特権として炭焼を許され、他の部落では、村井の名を借らなければ炭焼は出来なかつたとの事であるが、後には炭は朽木谷の各地で焼かれるようになり、それが古来朽木谷の重要な産物となり、現在、炭焼が住民の過半の生業となつてゐるのである⑧。

朽木谷は、平安朝の頃は、公家と山門、即ち比叡山と関係が特に深かつたようである。朽木谷が藤原頼通の所領になつたことは前に述べたが、これより先、貞観元年、相応和尚が比良山の西側、安曇川本流の上流、葛川の坊に息障明王院を開創してから、比叡山の勢力が安曇川の谷に及ぶことになり、この葛川の明王院を中継にして、比叡山の勢力は朽木谷の谷々全般に及んだようである。そして時代的には、その勢力は鎌倉時代にまで及んだようである⑨。

ところが、承久の乱の時、鎌倉方に功を立てた佐々木氏が近江の地頭職に任ぜられ、その嫡流である朽木氏が朽木谷を支配することになつて後は、朽木谷は武家の勢力の下に置かれることになり、当時、武家は主として禅宗を信じたので、この朽木谷もまた禅宗に風靡せられることとなつたのである。

鎌倉時代、曹洞禅の確立者となつた道元が、寛元元年八月北陸下向の際、朽木谷を通り、市場の上柏村、指月谷が、宇治の興聖寺の地形に似ているところから、領主の佐々木信綱に勧めてここに禅林を創立させ、宇治と同じ興聖寺の号を与えたのが朽木の興聖寺であつて、これが近江では最初の禅林となり、そして、これが佐々木氏の嫡流で朽木の支配者となつた朽木氏の代々の菩提所にもなり、それがきっかけとなつて、従来朽木谷の村々に建てられてあつた天台宗の寺々が多くは禅宗に改宗することになり、また興聖寺の末寺として多くの禅寺が建てられることにもなり、朽木領内五十三ヶ寺のうち禅寺は三十七ヶ寺に及ぶということになつたのである⑩。

朽木氏は、朽木谷の四つの谷、即ち安曇川本流筋の谷、^{アツ}麻生谷、^{ウド}雲洞谷、^{ハリハタ}針畑谷の四つの谷のうち前三者の合流点に当る市場の野尻の丘の

上に陣屋を設けた。三者の合流点と言うが、実際には四つの谷の合流点とも言えるのである。即ち第四の谷である針畑谷は、直接には市場のところで安曇川本流に合流はしないが、事実上この谷の水は、一旦、山城に入つて川合で久多の谷の水を併せ、再び近江国に入つて葛川の梅ノ木で安曇川本流の上流に合流するのであるから、市場の附近は、実際上は、朽木谷の四つの谷の合流するところと言えるのである。朽木氏が、こうした地点に陣屋を設けたことは、軍事的の見地からしても、経済的の見地からしても至極当然のことであつて、この陣屋の麓に市場の町が、朽木氏の城下町として、また朽木谷の経済的中心として発展することになつたのである。そして中世から近世初期にかけての我が国の動乱期にも、この谷は殆んどその渦中に巻き込まれることなく、朽木氏が、明治維新に至るまで、その支配を続け得たのである。これは、朽木氏の努力にもよるであろうが、また一つには、この谷が元来山がであり、山によつて他の地方と隔てられているという所謂地理的隔絶性に負うところが多いであろう。例えば、永禄年間湖北の浅井氏が湖西の地方を征服した際にも、その勢力は朽木谷までは及ばず、朽木氏はよくその独立を維持し得たのであつた。

朽木谷の歴史地理学的概観に於いて、尚一つとり上げなければならないのは、その交通関係のことであろう。

周知のように、琵琶湖の西側は、京都から北国に至る交通の要路に当り、ここを西近江路が北上して北陸に出るのであるが、朽木の谷は、この西近江路からは比良の山地によつて一応隔てられてはいる。しかし、西近江路とは別に、西近江路と併行して、京都と北国とをつなぐ一つの重要な交通路の一環をなしているのである。

ここは、地質学者の所謂花折断層の走るところで、安曇川本流の上流、その分水嶺に当る花折峠を頂点とする典型的な断層谷が、京都から北北東に一直線に走るところに当つてゐるのであつて、その道は、途中峠や花折峠を越えなければならない、相当難路であるが、京都から北国に出る最短路となるので、古来、西近江路に対

する間道として大きな価値を有して来たのである。前にも触れた如く、鎌倉時代、道元が寛元元年北陸下向の際に通つたのもこの道であつたし、また南北朝時代、正平六年、足利直義が兄尊氏との間に不和を生じて敦賀に逃れた時にとつたのもこの道であつたし、更に元亀元年、織田信長が越前朝倉氏を攻めた時、湖北の浅井氏に背後をおびやかされて余儀なく退却したのも又この谷からであつたのである。当時この道が難路であつたことは、例えば文明十八年、北国に下つた京都の聖護院門跡の紀行などによつても察せられるのであつて、それだけに軍事的にはまた意義があつた訳であるが、しかし、江戸末期には若狭の熊川から魚の荷物が、この道によつて京都に運ばれたし^⑧、また朽木氏も屢々京都と交通したから、この道の利用も相当多かつたものと考えられる。

前に述べた、この谷の隔絶性と、今ここに述べた、この谷の間道的性格とが生んだ最も著しい事件は、足利將軍義晴、義輝父子の朽木落であらう。

下剋上の世相が漸く厳しくなつた大永七年の九月、三好党に追われた義晴は、朽木植綱^{タネツナ}を頼つてこの谷に入り、岩瀬の興聖寺のところに居館を設け、享祿四年二月まで、ここで政務を見たのであつて、その時、この將軍の築いた庭園が今なお当時の特色を伝えてここに残っているのである。又、義晴の子義輝も天文二十年及び同二十二年から永祿元年までの五ヶ年間、三好長慶の難を避けてこの谷に逃れたのであつて、当時に於いては、朽木谷は、日本のうちでも一の特珠な、注目すべき場所柄であつたのである。

そして朽木氏は、織田から豊臣、豊臣から徳川への近世初頭の政変に際しても、巧みに事を処したため、引續いて本領を給せられ、朽木谷一帯を支配して明治に及んだのであつた。

このようにして、此の谷は、大体に於いて戦乱の害というものを殆んど受けず、村人たちは先ず先ず平和にその業に励むことを得て来たのであるが、その生活が、主として山林に依存するものであつたことは言うまでもなく、各谷の人々は、食物自給用の耕地を耕す一方、木材を

伐り出し、これを筏にして市場に流し、更にはそれを荒川から舟木に流し^⑨、また炭を焼き、これを市場から往復七里^{ニユウリ}の入部谷越で大溝の方に出ししたのである^⑩。

しかし、この谷の道は決してよい道ではなかつた。車の通らない道が多かつた。そんな訳で交通は不便で、それが産業の発展を妨げると共に、一面、生活上の風習や言葉などに古いものを多分に残させることになり、それが村人の醇朴さと相俟つて、この谷に何かしら桃源境的な観を与えて来たのであつた。

朽木谷に新しい時代の息吹きが入つたのは、我が国の多くの山村に於けると同様、極く最近のことであつた。明治二十八年、時の村長熊瀬仁右衛門氏の努力によつて、初めて荒川—長尾間に車馬の通行が可能となり、更に昭和三年になつて、トラックが、この安曇川ぞいの道を市場に入り、更に昭和二十二年には、バスが栃生まで——朽木谷の本流の、かなり上流まで達したのである。そして近年は、この谷に三重、兵庫、大阪などから、トラックが木材運搬のために年間約4000台も入っているのである。

木材の外に、この谷からは、前にも述べたように、炭が出るし、また砥石、マンガンなどが出る。また此の谷で育つ櫟は以前から相当好評を博し^⑪、そして、そうした色々の産物が出る一方、交通の便がよくなつてからは、安曇川の清流に鮎釣を楽しむに來る京阪神地方の人々も少なくなく、観光の面でもこの谷は開けて來た^⑫。

しかしながら、それで朽木の谷が変貌してしまつたわけでは決してない。まだまだ、この谷には保存すべき良さが残っていると共に、今後改良すべき点、開発すべき余地が多分に残されているのである。しかし、それには、朽木谷の谷々を結ぶトラック路の完成、花折断層に沿う京都—途中—花折峠—葛川—市場—三谷なる直線の幹線道路の建設、これと今津—小浜線との連絡等が、先ずその前提とならなければならないのではなからうか。また、よく滋賀県の北海道と言われるこの谷が充分に開発されるためには、朽木谷の谷々が堅く一つの意欲によつて結ばれ、そこに一体化の努力が続けられる必要があるのではなからうか。(昭和31年9月18日稿了)

註

- ① 朽木谷の奥地である針畑谷及び朽木谷の北隣に当る三谷が子田上柚として治暦四年の官符に出て来る。
- ② 朽木谷の奥から伐られた木材が筏に組まれて、安曇川の河口舟木まで流されたことは、昭和八年十月、筆者が安曇川上流の村々の実態調査を試みた際、親しく見聞したところである。更に朽木谷の奥から流し出された筏が琵琶湖の上を大津方面へ引かれて行く景観は、昭和八年頃までは、下阪本辺の湖辺の人々には、まだ懐しく眺められる景観であつた。それでも、もう当時では、湖上の筏は発動機船に引かれていたように記憶する。
- ③ 貝原益軒の「諸国めぐり」に「朽木の柚は朽木の奥にあり、名所也。今も材木薪をきる。朽木より京へは南にゆく十二里あり。朽木の町にて挽物を作り、漆にてぬる。梔盆などあり。漆多ければなり。京都へ出し諸国にうる。梔の実又当所の名産也。」とある。
- ④ 昭和二年七月発行の「高島郡誌」には、「木地山 轆轤村は今の木地山なり。木地職の者此に住せり。伝へ云ふ。往古愛知郡経谷村より移り住み、膳、盆、鉢子、木鉢等の製に従事し、大津、八幡、若狭、京阪地方に販売し、又、朽木氏の用命を帯びて盆及び鉢子を製作するを以て管内至る処、椽及び山毛櫨の材木を許されたり。戸数は昔は八十戸ありしが、天保の飢饉に非常の災を蒙り、八戸までに死滅せりと伝ふ。現今十五戸なり。従来は皆専業としたりしが、維新後其業大に衰え、今は僅に副業となすもの一戸あり。」とある。

昭和八年十月十九日、筆者が実地の調査を行った際の山田富吉氏の話によれば、「木地山は戸数は十六戸。木地を専業とするものではなく、高橋辰蔵氏が農の傍ら、冬季木地を作る。轆轤を使う。電力などはなく、道具を持つ人と綱を引く人と二人がかりでやる。椽の木、杉の木を用いる。直径二尺くらいのものならば出来る。荒仕事で形を作り、次に轆轤をかける。荒仕事の後、乾して轆轤にかけのるを二度挽きという。岩瀬に塗師がある。普通は表を赤、裏を黒く塗る。二十年前までは木地家が多く居た。冬の暇に木地を作つたのである。元来は夏も冬も、田の暇に村全体で木地を作つた。」云々とのことであつた。尚、筆者はこの時、椽の木の膳、杉の木の膳、その他にモミスクヒバチを採集した。

尚、当時は、安曇川本流筋の梅ノ木辺にも木地屋が一軒あり、これは電力で轆轤を動かしていたように記憶する。

(追記) 昭和八年秋、安曇川上流の村々調査の際の野帳を繰いて、木地山の木地についての如上の註を記し、尚、記憶を辿って安曇川本流筋の木地にも触れたのであつたが、その後、昭和七年春の野帳を繰って見て、筆者は昭和七年の五月四日、五日の両日に亘つても、安曇川の本流筋を実地調査していることが判明した。その時の覚書によると、「貫井の木地は、昔は綱引き(轆轤)を用いた。今もそれを用いるものがあるが、今は多くは電力を用いる。今、木地屋は四軒ある。沢井、林(2軒)、中原の四軒がそれで、昔から続いている。以前は八軒あつたが、木地をやめて京都へ出たりした。椽、桜、朴、櫨などを材料にする。貫井では白木地だけを作り、塗ることはしない。牛車や自動車で京都の方へ運ぶ。塗りは京都とか若狭とかです。若狭へは、貫井から市場まで自動車を出し、市場から熊川までは背負い、熊川からは又自動車を出す。未製品をアラキと称するが、アラキは久多、針畑から来る。貫井では、荒ぐり、仕上げを行うのである。物は、茶びつ、吸物椀、かし椀、丸盆などが主で、茶びつなどは、もく出しにする。沢井、林(2軒)中原の四軒が共同して今、一軒の工場を経営しているのである。云々」との事であつた。

- ⑤ 朽木谷の炭焼については、安曇川上流の村々全部に亙る筆者の実態調査がある。詳細については別の機会に発表したいと思つている。

- ⑥ その後、朽木谷は全面的に禪宗の風靡するところとなつたが、朽木谷に対する比叡山の影響は全然消え去つた訳ではないようである。その意味から、今も朽木谷の谷々に見られる、比叡山横川への月参りは吾々の興味を引かないでは惜かない。

昭和八年十月、筆者が安曇川上流の村々について実態調査を行った際の聴取によれば、「上村では正月三日元三大師代参一人を出す。能家では、六月から秋の収穫の終るまで毎月二人のものが元三大師に参る。横谷では横川へは月参りはせず、年に一回も参らないが、三年か四年に一回くらいは参る。古屋では、以前は三月から九月まで六ヶ月、村から二人横川へ月参りした。現在は、三月、六月、九月の三回、村から二人月参りする。伊香立一仰木線を横川に登り、仰木に下つて一泊するのである。籤引で代参を定め、費用は自弁で行く。」との事であつた。

- ⑦ なお神社については、朽木谷には比叡山関係の日吉神社、山王ならびに山の神の信仰に係する山神社、水の神かとも考えられる思子淵神社の色彩が濃厚である。思子淵神に対しては昭和八年以来、筆者は特に深い関心を有している。思子淵神については他日稿を改めて述べ度いと思つている。

- ⑧ 尚、参考のため、筆者が昭和八年十月、安曇川上流の村々の実態調査を行った際の見聞を記すと、「若狭の魚は、小浜から三宅まで汽車で来、三宅から熊川まではトラックで来、熊川からはベタ車(手車)で山中一保坂一途中谷一市場に来る。」との事であつた。又、筆者は実際に、若狭の遠敷村から、熊川一途中谷一市場を経て、久多まで魚を売りに来ている人に会つた。ものは塩物、焼魚であつた。十日に一度くらい来るとの事であつた。尚、小入谷では、「若狭の魚屋が遠敷村から、根米を通つて、峠を越して小入谷には入つて来る。三、四日に一度来る。魚屋三人が交替に来る。」との事であつた。

- ⑨ 思子淵神については、他日稿を改めて述べたいと思つているが、高島郡誌によれば、「この神は、朽木谷では筏の祖神として尊崇せられ、此の谷の筏に出るものは、十五歳になれば、神饌、神酒を供して、その守護を祈るのを例としている。」との事である。事実、思子淵神は朽木谷の各谷々に祀られてあり、そして筏流しも

朽木谷の各谷々の末端に至るまで行われている。参考のために、筆者が昭和八年十月、安曇川上流の村々の実態調査を試みた際の見聞の中から、筏流しに関するもの若干をここに記して置くことにしよう。以下がそれである。

「久多の材木は舟木に出る。筏師は梅ノ木からは入る。久多の筏師は少ない。」

「小川は山の便利がよいため、山が高い。材木は筏に組んで舟木へ出す。筏は藤で組む。三人で一日かかる。今日中に梅ノ木へ出せば、明日午後三時に舟木に着く。運賃はトラックの半値である。常水の時でも筏は出ない。出水と共に出る。小川の氏神は思子淵神社で、六月二十日が祭である。」との事。大ナタ、ノコギリ、トビを持って筏に行く人を筆者は実見した。

「古屋の山は、炭よりも材木の方が多い。材木は筏で舟木に出す。古屋の人は小川まで出す。小川から下では、葛川の細川辺の仁が小川まで来て流し、葛川の自分の家で一泊して次の日に舟木まで出す。」

「能家の材木は筏で流して舟木に出す。主として土地の人が流す。市場まで流し、それから下は他所の人が流す。但し、親方は自分で流して舟木まで行く。市場の親方は資本家で、能家の人は日傭である。百姓が日傭に行くのである。普通、炭焼専門の人は木材は出さない。稀に両方やる人がある。筏流しは、カリサン、ハバキを穿く。古屋などと同様で、雨ならば、板ガサ、ミノをつける。」云々。

筆者は、能家から雲洞谷へ筏が下るのを実見した。筏師は二人であつた。筏がユネ(田に用水を引く堰)の所を飛び下るのは壯観であつた。

「上村の材木は筏にして舟木に出す。大体は市場まで出し、市場から下は他所の人が流す。但し、都合によっては、舟木まで流す。」云々。

筆者は、上村の人が杉の木を筏に組んで市場まで流すのを実見した。

「大谷には家が三軒ある。一軒は永住的のものであり、二軒は犬丸から上つて来て田を耕し、秋の収穫を終れば犬丸に下り、犬丸に住むものである。冬は炭焼、筏流しなどをする。大谷の一軒も、炭焼、筏流しのため上村、犬丸に下つて行つて、夜帰るのである。」云々。

家一の入口で、筏師が筏に組む杉の木をはつつているのを筆者は実見した。また、犬丸から市場まで筏を流すという人に会つた。

横谷では、木地山の人が麻生まで筏を流すのを筆者は実見した。「筏は、ネソの木を焼いてねつたもので組む。材木は杉の木が主である。この筏は午後の一時に木地山を出て、四時に麻生に着き、筏師は日の暮れる迄に陸路を木地山に帰る。」ということであつた。筏師はハバキ、カリサン、ミノ、タビ、ワラジを着用し、筏のかじをとるものをネジキと言つていた。

「下自在坊、上自在坊では、炭は焼くが、材木は伐らない。材木は他村の人が来て伐り出す。川は細いが筏は流れる。三月頃、雪消え水のかさんだ時、春の長雨時などに筏を流す。それだけでなく、木を川に入れると水は激むものである。」云々。

「安曇川本流筋では、市場から上流古川までは、筏師は少い。古川に少しあるくらいで、筏師は、村井から上流に多い。」

「村井は、戸数四十戸、百姓が主であるが、材木商、日稼ぎもある。材木商は材木を買つて伐つて出す。日稼ぎは筏流し、炭焼であるが、筏流しの方が炭焼より多い。村井から久多まで行つて筏を組み、それを流して村井の自宅で一泊、舟木まで流して、帰りは自動車で帰つて来る。」

「栃生は田が主で、筏に乗つたり、炭を焼いたりする。村井と同様、久多まで行つて筏を流し、自宅に一泊、舟木まで流し、舟木から自動車で帰つて来る。二十年前までは舟木でも泊つた。久多でも泊ることがあつた。筏には、夏水の少い時は乗れないが、大水の時も乗れない。冬は水が少ないが、田に水を取らぬので水は流れる。」云々。

猪谷橋の上流半町のところに栃生谷発電所があり、その下の所で、筏を組むネソの木を伐つているものがあるのを筆者は実見した。

「細川にも、貫井にも筏を流すものがある。」

「梅ノ木は戸数三十六、七戸。うち四戸が新建であるが、他は殆んど凡てが炭焼を主業とする。筏流しは、天候による故、炭焼より少ない。」

「町居にも筏流しは少しはあるが、町居から上流の安曇川本流筋には筏流しはない。」

「大水の時は、筏流しは出来ない。その時は、筏を繋いで置く。」との事。筆者は、川合の下流のところに、大水のため流せず、つないである筏を実見した。この筏の上には、久多から出す桐の太木が積んであつた。

「筏には、杉が最も多く、檜、アチギ、松もある。」との事であつた。

久多村中在地の宮谷に志古淵神社があり、所の人は、「此の神は筏を組んで流すことを始めた神で、六月十九日が祭である。」と言つていた。

「久多の人も筏を流すことは流す。川合まで行くのである。」

「久多上村の十八戸は、寺の外は百姓をし、百姓が主であるが、炭焼、材木伐の外に筏流しをするものもある。」との事。

久多の三軒家では、筆者は、梅ノ木から久多に来て、筏を流して舟木まで行くという、ミノ、カサ姿の六人の筏師に会つた。

「宮ヶ谷では、秋の田が終ると、炭焼き、材木切りにかかる。材木は雪の時に、宮ヶ谷の雪の上を大川まで

出し、これを筏にして流すのである。」云々。

「大見の材木は、杉が主で、材木はベタ車で小出石に出す。大見では筏は流さぬ。」云々。

尾越でも、筏流しのことは聞かなかった。

以上を総括すると、安曇川の上流で、筏流しをするのは、南の方では、久多までということになるようである。そして安曇川の上流では、朽木と久多とが筏の本場ということになるであろう。しかしそれは、とりまなおさず、筏の本場が安曇川上流の殆んど全域に亘るということなのである。

尚、筏流しに関する総括的な記事としては、高島郡誌に、「針畑川は梅ノ木にて安曇川に合流、流域五里余、春秋二季筏を通ずべし。その他は猿流し。猿流しとは、小材(スリッパ)を流すに、洄流に材の堆積するに遇へば、筏師は嚮口にて下流に送る状、猿猴の筏を真似るが如きを以て也。北川流域、麻生川、雲洞川、市場にて安曇川に合す。共に筏を通ずべし。安曇川、源を山城に発し、筏の業は柄生、村井、荒川の間最も盛。朽木の木材は筏によりて舟木港に送る。筏は、小材は丸材として、大木は引割とす。丸材は九尺乃至一丈五尺とす。首尾を穿ち、つむらと称する柔軟なる木を捻じて編み、五六連乃至七八連を縦列して下る。之を下す寒暑を問わず、唯水勢の適否を見る。古来和歌にも詠ぜられ有名也。徳川時代には、木材の税法に四二寸、十分一の名目あり。四二寸とは二寸角長さ四尺を木材の単位とし、之に運上を課するもの。朽木家の法なり。十分一は価格の十分一の税を、安曇川を下りしものより舟木の番所に徴するもの。これ幕府の法也。」云々とあるのを参照すべきである。

- ⑩ 朽木谷の炭焼については、安曇川上流の村々全部に亘る筆者の実態調査があり、これは別の機会に発表したいと思っている。唯ここには、朽木谷の炭の運搬について若干補足して置き度いと思う。以下がそれである。但しそれは昭和八年十月現在のことである。

久多からは、梅ノ木へ炭俵を出し、帰りには、菓子や砂糖などの買物をして帰る。荷物は、背中にセナカアテを置きオヒヅルを負うて運ぶ。

古屋では、炭は梅ノ木と岩瀬とへ出す。牛に積んで出し、また自転車でも出す。背に負うても出す。女でも四貫俵を二俵負い、峠を二つ越して、四里の山道を岩瀬まで出す。駄賃は一俵につき十五、六銭である。朝は暗いうちに出る。帰りには醬油、塩、石油などを持つて帰る。

能家では、牛に炭をつけて岩瀬の方面に出す。

熊ノ畑では、筆者は、上野から日帰りで炭焼に入っている人に出会ったが、その人は麻の丈夫な着物を着て、四貫俵を二俵負うて上野へ帰って行くのであつた。

木地山では、市場着八十銭の極上の四貫俵を肩で麻生まで出し、あとは牛車で市場に出すとのことであつた。以前は、山を越して若狭の鉄道へ出したが、今は市場から江若鉄道へ出す。それが一部は安曇から京都方面まで直接トラックで送られるとの事であつた。

自在坊では、炭は牛車で保坂に出し、保坂からはトラックで今津に運ばれるとの事であつた。

川合では、筆者は、貫井から小川まで炭を焼きに行き、帰りには、四貫三百俵を二俵(若い人は三俵負うという)負うて帰る人に出会った。山を小川で買うて焼くのである。川合では又、梅ノ木の女が三人炭俵を負うて出たのを見た。また川合の人が久多に山を買い、炭を焼いて四貫四百俵にし、それを三俵になつて帰るのにも会つた。

久多村上村でも、筆者は、女は一俵または二俵、男は三俵の炭を負うて梅ノ木に出る者、点々としてあるのに会つた。そして、梅ノ木からは、重荷は安曇へ廻り、軽荷は途中へ出るとの話しであつた。

尚、上村での話しでは、以前は、女が炭を一俵自分で負い、牛に炭を負うせて、八丁平を越し、尾越を越して大見まで出たとの事であつた。当時八十歳くらいの婆さんの若かつた時代のことである、との事であつた。

三軒家に俵を編む七十歳の老婆があつたが、その人の若かつた時代には、三、四十歳の頃までは、四貫八百俵を自分も一俵負い、牛に四俵負うせ、八丁平を越して尾越に行つて、帰りには、京都からの荷物を持つて帰つたとの事であつた。

尾越での話では、今から二十年前までは、久多の在所から女が(男も少しは)炭を一俵負い、牛に四俵負うせて、八丁平を越して尾越に來た。尾越の種田八郎兵衛氏が炭問屋で、これを鞍馬の炭問屋に出した。鞍馬から男や女が來て、男は四俵、女は二俵を負うて帰つた。また尾越からは、牛につけて出した。また鞍馬からも牛を伴て來た。分家に種田弥三兵衛氏があり、この二軒が尾越の炭問屋であつた。小出石から大原に出す分は少なかつたとの事であつた。

百井では、炭は四貫四百俵にして、ベタ車で鞍馬の方へ出す、との事であつた。

- ⑪ 参考のために、筆者が昭和八年十月十五日から同十月二十一日まで、朽木谷の谷々、安曇川上流の村々の実態調査を行つた際の見聞の中から、牛の飼育に関すること若干をここに記して置くことにしよう。以下がそれである。

上村 家は二十戸。牛は十頭くらい居る。市場、大丸(上村の下流、雲洞谷)に博労が居つて持つて來る。三年くらい置く。金を負わしたり、負うたりする。肥やして出す牛は少い。

上野 牛は牝牛ばかり。但し牡牛も居るには居る。但馬、丹後と称するが、木ノ本辺のものであろうか。三、四年で交換する。

横谷 牝牛。市場から来る。二、三年置く。博労が交換に来る。牛は一戸に一頭くらい居る。

熊ノ畑 牛は牝牛で、三、四年置く。市場から来る。

木地山 牛は一戸に一頭くらい居る。

下自在坊 牛を田に使う。六戸に二頭居る。角川と市場の博労がつれて来る。五年くらいで交換に来る。金を博労に出す。

古川 三十五戸。牛は牝牛。但馬から来る。仔も産ます。市場、雲洞谷に博労が居る。五年くらい置いて換える。金を出す方である。古川では、仔を産ます故、六年も十年も牛を置いておく家がある。仔は、牝牛なら百円にも売れる。牡牛ならば半分である。

大野 家は二十三戸。牛は毎年博労が交換に来る。博労が金を置く方である。

栲生 牛は村でも産れる。又、博労が持つて来る。一年で交換することもあり、三、四年も置く人もある。川合 牛は各戸に居る。三歳で来て、五歳の五月に博労が連れて帰る。自分の牛ながら、ただで肥らせ、金を負いもせず、負わせもしない。

久多上村 家は十八戸。田には牛を使う。牛は三戸に二頭くらいの割合で居る。十八戸のうち、牛の居らぬ家は四、五軒である。朽木、針畑一主として朽木から博労が持つて来る。三歳で来て五歳で帰る。ぬか代を五円乃至十円置いて行く。博労から金を呉れずに交換するのをネジカヘという。以前は、女は炭を一俵負い、牛に俵を負うせて、大見へ行つた。八丁平を越し、尾越を越して行つたのである。今、八十くらいの婆さんの若い時代のことである。今は牛をそれに使わないのに、ネジカヘである。萱、よし、キノコ(ホソの木、檜の木などの木の芽)を茹つて来て、牛に踏ませて、肥料にする。ホトラゴエという。カネゴエ(金肥)は使わない。牛には、田の畔、野の草を食わせる。冬にやる草は二階に上げて蓄える。

久多三軒家 三軒のうち二軒は田があり、米は足りる。一軒は梅ノ木から買う。牛は二軒とも居る。朽木から博労が持つて来る。三歳で来て五歳まで、足かけ三年居り、ネジカヘするのである。

久多宮ヶ谷 家は十五戸。十七戸ともいう。牛は各戸にはなく、無い家は近所から借りる。牛は、朽木市場から、博労が連れて来る。三歳で来て、足かけ三年置く。七歳くらいまで使う家もある。普通はネジカヘであるが、七歳にも八歳にもなれば、金をやる。牛の居らぬ家は、十七戸のうち五戸くらいである。牛の居らぬ家へは、無代で借す。但し、その間の食べものは、借り主の持ちである。

久多下村 家は九軒。牛は六頭居る。三歳乃至四歳で来て、四歳乃至五歳で帰るものが多い。六歳まで置く家もある。田の深い家は六歳まで置く。普通、ぬか代は置かない。六歳まで置けば、金を出さねばならぬ。

大原村尾越 牛は田作には絶対に使わない。以前は、丹波方面から鞍馬を経て牛が来たが、牛を田に使うと田が深くなり、悪くなるので、牛は使わない、という。

大見 家は十七軒。牛は殆んどどの家も持たない。江州から借りて来る。牛を使う家は十七軒のうち二軒である。借りて来た牛には、夏、コエを踏ます。牛は丹波の方から博労が連れて来る。一、二年置いて交換する。負いを出したり、博労の方から負いを出したりする。家は昔から十五軒。実際は十七軒である。

百井 家は三十軒。田には牛を使う。田が五反もあれば、牛を使う。牛は大原、鞍馬から来る。各自に飼う。但馬牛というが、実際は、江州奥畑で育てたものが京都に入り、それが、鞍馬なり小出石なりから来るのである。百井に牛は六、七頭居り、全部牡牛で、ベタ(牛車)を引かせ、田を耕すのに使う。博労は加茂、下鴨、二条辺に居る。云々。

⑫ 朽木谷の現状については、稿を改めて、今少しく詳細に分析して見度いと思つている。

附記 本稿の作成に当つては小林博学士の助力に俟つところが甚だ多かつた。明記して深く感謝の意を表し度い。